７　次の文章は、インターネットを用いた情報検索システムについて述べた論考であり、本文一行目「この新しい情報システム」は、「コンピュータの検索システム」を指している。本文を読んで、後の問いに答えよ。

〈新潟大〉二〇二一年度出題

　この新しい情報システムの中で生み出される情報には、大きく二つの種類があります。一つは、個人やグループが、メールやTwitter、Facebook、ウェブサイト等を通じて発信していく情報です。もう一つは、誰かがネット上で買い物をした際の購買記録、ＧＰＳで残った移動①ケイロの記録、顔や指紋の情報、医療機関などでの診断記録など個人や集団が非意図的に生み出している莫大な情報です。インターネット社会では、これらの意図的、非意図的な情報が、コンピュータ回路の中で加速度的に流通し、増殖し、蓄積され続けます。明らかに現代社会は、情報希少の時代から、情報過剰の時代へと劇的に転換したのです。

　情報希少の時代は、出版社や新聞社、放送局などのマスメディアにとって幸せな時代でした。なぜなら、情報を保持していること自体に価値があり、それを本にしたり、記事にしたり、番組にしたりして②カセぐことができたからです。もちろん、そうした状況が完全に失われたわけではありませんが、今や、ネットに接続すればとりあえず知りたい情報はタダで簡単に手に入れられると大半の人が思うようになっています。情報提供者としてのマスメディアの存在価値は大幅に減じたのです。こうして情報産業の重心は、情報を大衆に提供することよりも、その上で情報やコンテンツがやり取りされるプラットフォームを作り上げ、それを人々に利用してもらう方向へと変化しました。「マスコミ」から「プラットフォーマー」へのこの位相転換は、日本ではグローバリゼーションと同時並行的に生じていきました。

　この変化は、単に産業の変化というよりも、メディアで流通する情報やコンテンツの質的な転換を伴っていました。もともとマスメディアが果たしていたのは、実は単に情報やコンテンツを提供することだったのではありません。出版も新聞も放送局も、それぞれ異なる仕方で数ある情報から重要なものとそうでないものをり分け、どの領域で何が重要かという優位づけをし、人々が社会の動きを認知する前提を形作っていました。つまりマスメディアは、情報のゲートキーパーの役割やアジェンダの設定者の役割を果たしていたのです。

　それらは、しばしばなる政治的意図をもってなされていましたから、メディア間の立場の違いや信頼度の違いがあったわけです。それでも、あるメディアがあまりにも極端な立場をとったり、差別的発言をしたり、誤報を繰り返せば、当然ながら他のメディアから③テッテイ的に批判されますから、これらの面での最低限の制約は働いていたと思います。

　しかし、インターネットが普及し、誰もが発信者となっていくことで、Ａ既存のマスメディアの特権性は、急速に失われていきました。大手マスコミも、個人発信のサイトと似たようなものと見なされ、あらゆるメディアが横並びとなっていったのです。そうすると、大手マスコミは以前ほどには④ヒッスのものではなくなり、広告料収入も下がっていく。収益が落ちればその分、コストをかけられなくなります。しかも、多メディア化が進んで一人の人間がしなければならないことは増える。つまり、予算縮小とスタッフの多忙化が連動するわけです。そうなると、情報についての検証やコンテンツの作り込みが甘くなるといったことも起こる。こうして、大手マスコミの劣化が目につくようになると、個人発信のブログと大差ないという認識がますます広まり、ＳＮＳのインフルエンサーのほうがマスコミ以上の影響力を持つことすら生じてくるのです。組織の力が弱まり、個人の力が強まることは、一般の人々にとっても報道やコンテンツがより身近なものになったように感じられます。

　しかし、誰もが発信者となることは、私たちを取り巻く環境世界全体で流通する情報を不安定化させます。情報ソースのはっきりしない、誰がどんな経緯で生み出したのかわからない情報が不可逆的に増殖していくのです。もちろん、インターネットで流通する情報には、かつてのマスメディアの枠組の中でなされていたよりもはるかに調べ抜かれた情報も少なくないので、ネット情報全体が劣化しているのではありません。同時に、ネットの情報世界は保証のない世界であり、それはどこか都市の街頭で流れるやカフェでの会話、壁新聞や号外、集会での演説や路上の看板にも似ています。ところが、このネットの世界は、相手の顔があまり見えない点で、普通の街中とも異なります。そこでは誰しもが自分の顔を隠したまま大きな声で話すことができますし、別の人間の姿を借りて誰かに話をしていくことも可能です。しかもこの匿名性は、プラットフォームにやって来た人々にとってのもので、プラットフォームの運営者やシステムの監視者にとって匿名なのではありません。

　このＢネット環境に関し、対極的ともいえる二つの評価がなされてきました。一方は、匿名的で水平的、しかも多数の異質な人々による議論が知的創造性を拡張するというものです。たとえば、二〇〇〇年代に多くの人に読まれたジェームズ・スロウィッキーの『「みんなの意見」は案外正しい』（角川書店、二〇〇六年）で著者は、「多様性に富んだ集団は、メンバーの大半がそれほど賢くなくても、⑤タクエツしたリーダーがいなくても、往々にしてその集団の最も優秀な個人よりも正しい判断を下すことができる」と主張しました。つまり、非常に優秀な人たちの同質的な集団よりも、優秀な人とさほどでもない人たちからなるハイブリッドな集団のほうが正しい判断をすることが多いという主張です。多様な個人による民主主義は、賢人政治に勝るというわけです。トップクラスの大学の優秀な学生ばかりを集めたグループよりも、優秀な学生もそうでもない学生もいる、でこぼこの個性が集まったグループのほうが創造的な仕事をするというのはありそうな話です。エリート大学の教室と異なって、ネット空間はしばしばこのようなごった煮的な集まりを可能にします。

　ただしこれには、次の四つの条件が満たされていなければならないとスロウィッキーは言っています。一つ目は、突拍子もない意見やピント外れの意見も含め、多様な意見が保証されていなければならないことです。二つ目は、意見の独立性が必要です。たとえば、声の大きい人がいて、それが周囲の人に影響を与えてしまうとか、少数派が沈黙するようなことがあってはなりません。三つ目の条件は、意見の分散性で、各人が自分の意見を形成する際に、その判断材料となる情報が⑥キンシツ化していては駄目で、各人にとって身近なだけでなく、バラバラな情報である必要があります。さらに、各人が意見形成をしたとして、それらの意見を集約する合理的な仕組みがなくてはならない。これが四番目の条件です。これらの条件がすべて満たされるならば、多様な能力、個性からなる混成グループは、優秀な人だけからなるグループよりも常にいい結果を出すというのが、彼の議論でした。

　スコット・ペイジは『「多様な意見」はなぜ正しいのか』（日経ＢＰ社、二〇〇九年）の中で、多様な能力をもつ人からなる集団のほうが、エリート集団よりもいい結果を出すためには、さらにいくつかの条件が整っていなければならないと指摘しています。その一つは、解決すべき課題が十分に難しいことです。受験問題の応用のような単純な課題の場合、いわゆる「頭のよさ」だけで答えを出せてしまったりもするのですが、世の中には環境問題をはじめとして、ちょっとやそっとでは答えが出ない難問が山ほどあります。そういった難問には、同質的な優秀さよりも多様な知性のほうが力を発揮するのです。また彼は、そのグループに他人のアイデアに疑問を発せられるリーダー的な人が、少なくとも一人以上は参加していることも必要だと指摘します。つまり、全員が⑦ボンヨウでは駄目で、賢い人間も必要だということです。一人ないしは複数の議論の役が必要なのです。さらにグループのメンバーがある程度以上は賢いことや、ある程度以上の人数がいることといった条件が加わると、集団には「認知的な多様性」が生まれるのです。

　なぜ、Ｃ認知的多様性が、難しい課題の創造的な解決には重要なのか。その答えは比較的容易に想像がつくと思います。というのも、往々にして優秀な人というのは、似たような思考パターンを持っていて、何かを分析する際、答えを出しやすい⑧コウリツのいいモデルを使うことにしようと、あっという間に意見の一致を見ます。この素早さは、まったく別の観点からの意見が出てくることを困難にしてしまいます。そのモデルはそれなりの合理性を持っているので、全然違うふうに考える必要はないかに思わせてしまうのです。そして、そのモデルを使ってある結果が見えて、それを解釈する段になっても、みんな同じような内容になってしまう。ところが、そこで思いもしない新たな問題が発生したりすると、途端に行き詰まってしまうこともある。突拍子もない解決やブレークスルーが生まれにくいわけです。

　もしここで、取り組む課題が難問でなければ、彼らは他のどの集団よりも早く答えを出すことができるでしょう。しかし、それだけです。取り組むべき課題がなかなか答えの出そうもないような場合、まったく違う視点から見ている人や、異なる手法を身に着けている人がそこに参加することで困難を突破する力が増すわけです。もちろん、とんでもないことを言い出して、あらぬ方向へ行ってしまう場合もありますが、いろいろな人間がいて多様な観点があれば、ブレークスルーも生まれやすくなります。ですから、同質性の高いエリート集団よりも、ちょっと突拍子もない人や、やたら陽気な人とかが、優秀な人たちの中に混じっている雑多な集団のほうが、多くの場合、よりよい答えを導き出せるわけです。

　インターネットでの討議の可能性をポジティブに評価するこうした観点は、二〇〇〇年代初頭までは優勢でした。ところが二○一〇年代になると⑨ヨウソウが劇変します。インターネットの中のコミュニケーションは、自由な討議であるかのように見えながら、実はコンピュータのアルゴリズムによって巧妙に構造化されており、異なる立場の対話を促進するよりも、それらの間のＤ見えない壁を強化する可能性が高いことが示されていったのです。

　その代表的な考察は、イーライ・パリサーの『閉じこもるインターネット』（早川書房、二〇一二年）によってなされました。彼は、インターネットの検索サイトのアルゴリズムが、ユーザーの過去のクリック歴や検索歴に基づいて情報を構造化しており、ユーザーが見たいであろう情報を推定し、それが優先的に出てくるような仕組みを実現してしまっていることを指摘し、これを「フィルターバブル（Filter Bubble）」と呼びました。私たちはこの種のアルゴリズムを、たとえばアマゾンがメールで本を⑩スイセンしてくる際に頻繁に経験しています。フィルターバブルのアルゴリズムが支配するネット環境では、ユーザーは自分の関心に合うニュースや記事とだけ接していればよく、気に入らない記事や関心のないニュースからはますます隔離されていきます。膨大な情報がれるネットの世界で、それぞれの個人はそれぞれの狭い関心や立場の被膜＝バブルの中に孤立していくのです。

　フィルターバブルは、異なる立場の対話の可能性を開くという初期のインターネットがもたらした可能性を反転させます。インターネットは対話のメディアではなく、むしろ諸個人が自分の価値観に閉じこもり、異なる意見の他者を排除する傾向を促進するメディアとなっていったのです。そして、このインターネットの自閉化は、マスコミに対する敵対意識をそれまで以上にエスカレートさせました。「フィルターバブル」に包まれたネット市民たちは、マスコミ批判の記事を読むと、わが意を得たとばかりに次々と「いいね！」を押すようになり、その数の広がりが、ますますマスコミヘの疑いを増殖させていったのです。

（吉見俊哉『知的創造の条件』による）

問１　傍線部①～⑩のカタカナを漢字に改めよ。

問２　傍線部Ａ「既存のマスメディアの特権性は、急速に失われていきました」とあるが、特権性が失われる以前に、既存のマスメディアは、どのような優位性を持ち、どのような働きをしていたか。本文に即して、百字以内で説明せよ。

問３　傍線部Ｂ「ネット環境」は、既存のマスメディアと、どのように異なる特徴を持っているか。本文に即して五十字以内で説明せよ。

問４　傍線部Ｃ「認知的多様性」とは、どのようなものか。その特徴と意義を、本文に即して百二十字以内で説明せよ。

◎問５　傍線部Ｄ「見えない壁を強化する」とは、どういうことか。本文に即して百字以内で説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　①＝経路　　②＝稼　　　③＝徹底　　④＝必須　　⑤＝卓越

　　　⑥＝均質　　⑦＝凡庸　　⑧＝効率　　⑨＝様相　　⑩＝推薦

問２　Ａ大衆に対して、希少な情報を独占しているという優位性を持っており、Ｂ自らの持つ情報を選別して各領域での重要度の優位付けを行った上で提供することで、Ｃ大衆が社会の動きを知る前提を形作る働きをしていた。

（96字）

「優位性」と「働き」のいずれかがなければ全体０。

Ａ＝４／Ｂ＝３

Ｃ＝３〔「情報のゲートキーパーの役割やアジェンダの設定者の役割」をそのまま用いるのは不可。〕

問３　Ａ誰もが発信者であり、Ｂ匿名的で不確かな情報が Ｃ不可逆的に増殖していく不安定さをはらんでいるという特徴。（49字）

Ａ＝３／Ｂ＝４／Ｃ＝３

問４　Ａより優れた知的創造性を生み出すために、多様性に富んだ集団を形成しようとするものであり、Ｂ匿名的で水平的、しかも多数の異質な人々が自由に議論に参加していることが特徴である。Ｃ同質の優秀な集団よりも難問の解決には適しているという意義がある。（116字）

「特徴」と「意義」のいずれかがなければ全体０。

Ａ＝３〔「より優れた知的創造性を生み出すため」は意義の説明に入れてもよい。〕

Ｂ＝４〔「水平的」は、「それぞれの意見が平等に尊重される」などでも可。〕

Ｃ＝３

問５　Ａインターネットの検索サイトのアルゴリズムにより、Ｂ諸個人は各自の関心に合う情報だけが提供されることで、Ｃ自分と異なる価値観に触れることがなくなり、Ｄ異なる意見の他者との分断がますます進んでいくということ。（99字）

Ａ＝２

Ｂ＝２〔Ａと合わせて、「ユーザーひとりひとりの価値観や関心に応じて情報を提供するインターネットの仕組みによって」などでも可。〕

Ｃ＝３

Ｄ＝３〔「ますます」など、強くなっていることを示す語がなければ減点１。〕